

ご存知ですか？ 矢口渡の「放光地藏尊」

矢口渡駅から商店街を南方向に歩き、「西友」手前の路地を右に曲がると左側に祠があり、中にはいつもどなたかが世話されているお地藏様がいます。放光地藏尊です。看板に由来が書いてあります。

★

第二次世界大戦まったただ中の昭和二十年四月十五日夜半、この地はアメリカ空軍B二十九の爆撃を受け無数の焼夷弾と爆弾が投下されて矢口渡駅から多摩川の土手に至る迄完全な焼野原となり多数の焼死者を出しました。当時、この家の主、鈴木三郎は、一人焼跡の防空壕に残り、廃墟となった土地を



放光地藏尊



見てまわると、あらからこちらかも焼死した人の遺骨が見出されたので涙ながらにそれ等を拾い集めては供養をしていました。何の罪もないこれ等戦災犠死者の霊を慰めたくてこのお地藏さまの建立を思いつき、昭和三十二年九月二十一日、その名も「放光地藏」と名づけて末の世までも平和である事を願いました。

★

鈴木三郎さんは道路向かい側（西友の隣 ココ薬品の跡地あたり）で

新特別出張所長 就任あいさつ

みなさま、こんにちは。昨年十二月に蒲田西特別出張所に赴任いたしました元木と申します。

かまにし17は、蒲田西特別出張所管内の特徴ある施設、また、ゆかりのある人物にスポットをあてた記事などで構成されています。情報提供だけにとどまらない、一味違った地域情報紙となっています。

このかまにし17が、一人でも多くみなさまにお読みいただけるよう、編集員のみなさまと協力して今までの以上に、読み応えのある紙面にしていきたいと考えております。

また、情報紙を通じて、お住いのみなさまに、この地域に興味をお持ちいただきたきっかけ、さらに、好きになつていただくお手伝いができれば、こんな幸せなことはありません。最後になりますが、今後ともかまにし17をよろしく願います。

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一番五
(三七三二)四七八五

(取材 大良委員)

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,752人
	女	29,324人
	計	61,076人
世帯	34,071世帯	

平成28年2月1日現在

わがまちの顔

知られざるオーディオ界の星

島元 澄夫さん

オーディオ界のOnly oneの道を行く



オーディオを主体とした営業に転身。第三回真空管オーディオ・フェアで金賞を受賞。以降連続五回の金賞と特別賞も受賞。二〇〇五年には米国ラスベガスで行われたハイエンド・オーディオ・ショーに出展。同年グッドデザイン賞を受賞。その後PSEやPL法等の環境変化で「FAST」発売が困難となり、二〇〇七年伊豆の国市へ試験室を移し、自社ブランド「ALLION」を立ち上げた。このアンブはオーディオ評

今回紹介する島元さんは、大城通り商店会・中ほどにある事務所兼オーディオ試験室を構えている。そこにお邪魔して話を伺った。試験室は三十名程度収容可能で、外部に音が漏れないよう又音響効果を最大限生かせるよう設計・施工されており、時には愛好家やプロによるジャズライブ等にも利用されるそうだ。

こんな島元さんは鹿児島県出水市の出身で一九四九年生まれの六六歳。一九七八年家電のサービスマンを経て、家電販売を開始。技術を売りにした営業を行ってきたが、一九九七年ふとした縁でアンブ発売元となり



論家、ジャズ評論家、オーディオ機器発売元の試験室用としても使用されているそうだ。アンブ発売元となった時期から、ファンへのサービスを兼ねたオーディオ専用電源工事を行うようになり、これが口コミにより、多くのオーディオファンからも依頼が来るようになった。そしてオーディオ評論家の薦めもあって、オーディオ誌に「オーディオとシアーターの為の電源工事」を三年間連載。その後も時折オーディオ誌にオーディオシアーター用電源工事関連の記事を執筆。

電源工事を始めた当初は、電力会社や建築会社の現場監督、電気工事業者、大学教授や有名評論家に、かなりの外れの批判を受けたりしたそうだ。

色々な批判を受けるたびにさらなる技術向上を心がけた結果、それが功を奏して現在では競合する同業者も無くなり、北海道から九州まで頻繁に工事依頼があり出張施工しているとか。

最近ではクラシック音楽の有名会社やスタジオ、地元でも有名な「亀吉音楽堂」等々も施工。お客様と共に、オーディオの感動を共有できる仕事への感謝は尽きず、毎日が楽しくて仕方ないらしい。

(取材 森委員)

平成28年3月1日発行

かまにし

第59号

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

シリーズ 六郷用水物語 逆川(さかさがわ)の上流・能登川堀

アロマスクエアの前庭には、一九八六年に公開された松竹映画『キネマの天地』に使用された松竹橋のセットが据えられている。



アロマスクエアの松竹橋

アロマスクエアの敷地はかつて松竹キネマ蒲田撮影所であった。大正九年(一九二〇)から昭和十一年(一九三六)、大船へ移転するまでの十二年に一二〇〇本に余る作品が作られてきた。
敷地内の区民ホール・アプリコの一階には、かつて逆川に架つて

いた実物の松竹橋親柱が展示され、地下には撮影所のジオラマが置かれている。撮影所施設の配置図や、前を流れる逆川と入口正門前にある松竹橋を見て取ることが出来る。

逆川(能登川堀)は六郷用水南堀から分水し、呑川菖蒲橋の西袂で合流するまでの全長約一・五キロメートルの用水路であった。今回は、南堀の分岐点からアロマスクエアまでの用水路跡を紹介する。その前にまず、逆川と能登川堀の関係について説明しておく。逆川は撮影所前の松竹橋下を流れていたことで広く知られているが、平成二十六年には緑道として再整備され、蒲田東口の賑わいの拠点「さかさ川通り」として生まれ変わっている。名前の由来は大潮の際、此処まで海水が逆流して来たことと伝えられている。

一方、JR以西の能登川堀について詳細な資料はあまり残っていない。南堀との分岐点は、東急多摩川線と環状八号線が立体交差している地点になる。多摩川線と並行してきた南堀もここで(東矢口

三丁目二十四番) 中断して、新蒲田二丁目二番で復活する。



中央奥に見える道路が分水路跡

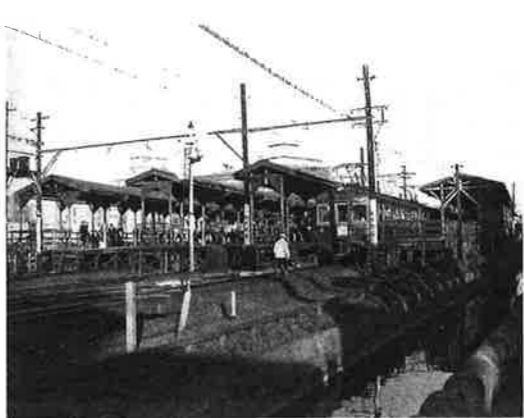
南堀からの分水路

東矢口トンネル上の踏切北側を斜め交差するのが南堀である。左側ロータリー内に笠つき標識柱が建っている。右には矢口消防団第三分団の倉庫が建つ袋小路が見える、ここが南堀行き止まり地点である。この先、Y字路の右側道路が分水路跡である。

東矢口三丁目公園を右に見て、多摩川線と平行に進む。一直線に約四〇〇メートルで、右に多摩川線の踏切が見える。真新しいアスファルト路面に右折矢印のタイヤが埋め込まれている。この矢印に従い右折、踏切を渡りすぐに左折し線路に沿って進む。右側、西蒲

田公園には「六郷用水案内板」が建てられている。

踏切から東急蒲田駅までの約五〇〇メートルの間には、昭和四十年頃まで用水路(下水路)が開渠として残っていた。池上線、目蒲線の複々線として高架駅舎工事の際に暗渠となった。突き当たったJR線をくぐり東口へ向かっていった。東急駅ビルの白いビルと、その先に大田区総合庁舎のドーム屋根と赤いアンテナ塔が見える。



改修工事前の東急蒲田駅(昭和40年)

新編武蔵風土記稿

ここで話を江戸時代まで遡り、村の歴史を紐解くことにする。文化・文政期に編纂された新編武蔵風土記稿、巻四十二の御菌村

と小林村の項にそれぞれ六郷用水について書き込みがある。

御菌村「西ノ方小林村ヨリ入り女塚村二通セリ」
小林村「安方村ヨリ入り所々ノ水田ニソソキ、餘水ハ道塚村及御菌村等ニイル」

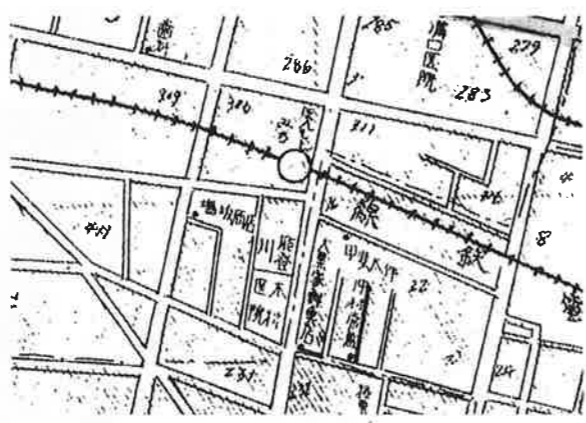
この文面から、近代になり耕地整理、鉄道の敷設等により流路の変更があったにせよ、当時、確かに用水路が実在したことを確認することができる。

能登川堀

大田区立郷土博物館編集による『六郷用水・大田区のまちなみ・まちかど遺産』P5に六郷用水流路図が掲載されている。水路図によると安方村南堀から小林村へ二本の支流が分かれている。いずれも蓮沼村、女塚村を経由して北蒲田村に至っている。そのうちの一本が御菌村を通過し、「能登川堀」と名付けられている。ちなみに、矢口村以降の南堀の支流で名前が付けられているのは第六天堀、天王木堀、とこの能登川堀のみである。

能登川堀という名称に関する資料があまりに少ない。大田区の図書館、郷土博物館にも問い合わせ

せたが前記の冊子、一冊のみであった。



本門寺道駅下に見える能登川(昭和11年)

筆者は建設関係の仕事に永年関わってきた。三十数年前に、屋号と言うより通称「能登川」と呼ばれていた鳶職人に出会ったことを思い出した。当時六十歳前後で苗字は「石渡」であった。用水路との関係があるのか。「鳶職・能登川・石渡」で、土着の年輩者、同業者多数に情報提供を求めた。多摩川二丁目と新蒲田二丁目に住む多田氏(能登川)縁戚の方を探しあて、話を聞くことが出来た。二人からの話を総合し、筆者の解釈を加えた能登川堀像が浮かび上がった。

能登川石渡家

能登川石渡家は代々の当主が保兵衛を名乗る小林村の旧家で明治大正期には旧目蒲線の道塚駅一帯の地主であった。
新編武蔵風土記稿は小林村の家数二十九軒と記している。大正、昭和初期までに実施された耕地整理前は、おそらく居住者も限られた数であっただろう。

昔は、いずれの村でも身内同士で呼び合う時には、本家、分家、商売名や地名等を使っていた時代が続いた。保兵衛の場合も近くに能登川堀が流れていた、あるいは能登川と隣接していた。そう考えるのが妥当である。

耕地整理後は、用水路は排水路へと変わっていった。保兵衛(代不明)は大半の土地を手放し、道塚本通りで建材業を営み、屋号を伝来の能登川と名乗った。戦時中の強制疎開や戦後の後に、建材業を再開(石渡豊吉)、しばらく建材業を続けていたが、その後同所を離れ鳶、土建業に転業した。筆者が石渡氏に出会ったのもこの時期であった。

大田区本庁舎とアロマスクエア

明治五年(一八七二)、新橋、横浜に日本初の鉄道が開通した。当然能登川堀も暗渠として埋められ



本庁舎から見たアロマスクエアビル

蒲田駅東口で本庁舎のアンテナ塔と、アロマスクエアを結ぶ路上に立つ。振り返ればお互い真正面に向き合っている。この場所が逆川と名前を変えた能登川堀の流路であった。

参考文献

- 『東急の駅今昔』
- 『六郷用水 大田区まちなみ・まちかど遺産』
- 『大田区の文化財 第26集 地図でみる大田区(3)』

(取材 都築委員)